

### 目的

適塾の開祖、緒方洪庵が蘭学という形で手本としたオランダで学び、制度上および実生活上の相異を体感し学ぶため。

### 内容

University Medical Center Groningen (UMCG) 麻酔科での参加型臨床実習。主に手術部にて麻酔科医、麻酔科アシスタントと麻酔管理を行った。さらに、学外では International Student House で様々な国から学びに来ていた学生たちと共同生活。

### 成果・抱負

端的には、文化の違いによる考え方、制度の組み立て方の相違を肌で感じました。まず臨床実習を経て感じたことは、寛容でありつつ合理的でコンセンサスの取れていることと自己責任が共にはっきりしている、というオランダ人の気質が随所に表れていたということです。例えば、麻酔科医や麻酔アシスタントの個々人の知識や技能を揃えることを意識しているような印象はなく、個人の問題であり自己責任であるという扱いで、実際医師間のレベル差は日本よりもあったように感じました。日本においては徒弟関係によって一人一人のレベルがある程度標準化されるのとは対照的であるものの、どのような長所を好みどのような短所を容認するかを意識しているような印象であったため、共通認識の持ち方の上手だと感じたのも事実です。オランダで見た様な自己責任を求める姿勢は当然個々人の意識の違いによって日本のような姿勢よりもレベル差を生みやすいという意味では不利ではないかと心配になりつつも、**working share** を国策とした国の面白い面と医師であることに対する考え方の違いの一端を見れたと思いました。日本では「医師は聖職者」という構図が医師側だけでなく患者側にも意識されることが多い印象ですが（良かれ悪しかれ）、オランダ人医師の働き方や様子を見て彼らがどのように思っているのか疑問に思い、医師として働くことをどのように思っているのかを数人に尋ねてみたところ「責任のある仕事だが、仕事は仕事。人生ではない。自分の生活・人生を楽しんでいないとこんなにストレスフルな仕事を間違いなく行えないよ。」というような返事でした。彼らは働くことが決まっている時間の中で非常に集中して働き、業務を全て終えて余らせた時間で論文を読んだり他の医師と情報交換をした後、他の手術室の手術が長引いていても当番でなければ定時に迷いなく帰る。さらに、UMCG 麻酔科ではスタッフが非常に多いため平日であっても **working share** のため 1 日は休みがあるようでした。ただしこれは年齢や経験年数も関係しているようだったので一概には正しくないかもしれません。また、日本の麻酔科では、ある程度の経験を積んでいても上級医と共に診ることは十分にありうるように思いますが、

オランダでは「独り立ち」が日本よりも早いように思いました。さらに、ドイツ語圏を中心にヨーロッパ中から人材交流が盛んであるようで、他国からの優秀な人材をスタッフとして寛容に受け入れることで互いにとって利としているようでした。

働き方の違いは国の決めている方針によって大きく影響されていると思いますが、日本に上手に取り入れられる点は数多くあるように思いました。上述していない事でも、スタッフ間の風通しが日本よりも良く、職種に関係なく「その場でできるものができるところ」という共通認識を共有しているように感じられた点など、意識改革だけで改善される可能性のあることは沢山あるように思います。

留学前から予想していたことですが、実際行っている医学的な内容として大阪大学医学部付属病院が劣っているとは全く思いません。しかし、オランダ人の大局観は優秀で非常に刺激になりました。国が違えば風土も違い、それぞれの考え方やものの捉え方があると思います。しかし、この時期にオランダで 1 カ月に渡って臨床実習を行わせて頂いたことで受け取った刺激を可能な限り伝えていくのが岸本先生から奨学金を頂いて留学に行かせて頂いた者の義務であると思っています。

最後になりましたが、国際交流センターの馬場先生、医学科教育センターの和佐先生、渡部先生 には大変お世話になり、大変感謝しています。